

それでも海へ

宮古市立山口小学校 六年 坂下 幸音

僕の家は、魚屋。祖父が七代目、父が八代目。だから、僕は小さい頃から宮古でとれた新鮮な魚を食べて育ちました。

春にはわかめやます。夏はウニ。秋はサンマで冬はサケ。春夏秋冬、旬のおいしい魚が店の中いっぱいに並んでいました。

でも、震災後は宮古でとれる魚がぐんと減ってしまった。お客さんに喜んでもらうえないつらい日が続いているのです。

祖父や父たちは、

このまま店を続けていけるのか。と話し合い、とうとう店を閉めることになってしまいました。

そして、魚屋から漁師になると一大決心をした父。

魚屋の事務が、今は漁師一年生。宮城県の女川での修業が始まったのです。

幸音は六年生。お父さんは漁師一年生。お

父さんの方が下だな。

と言って笑う父の顔は、帰って来るたびに真黒に日焼けしていつか、手や足、顔の傷もどんどん増えていくかんじがしてきます。

そんな父は、家族とはなれ一人です。川で毎日一言日記をつけ始めました。

失敗して先輩漁師におこられた。

次から次へと覚えることがいっぱい大変。

家族に会いたい。

などきたない字で書いてある日記。

そのふらふらとした弱々しい字の中に、父のつらさがにじみ出ているようで、胸が苦しくなってしまう僕。

でも、どんなにつらくても僕たちの前では仕事のつらさを見せません。

だから、父が女川に戻る時は、必ず家族みんなが車が見えなくなるまで手をふって見送ります。

今年の夏のお盆。お墓参りに行った時、父の大きな背中を前にして歩いていると、左足

きひきずって、足をかばうように歩いている

ことに気づきました。僕が、

「運動神経抜群のお父さんでも足を痛めるく

らい船の仕事は大変なんだね。」

と声をかけると、

「魚屋から漁師になっただけど、どちらも海の

仕事。オレはやっぱり海と生きていきたい。

お父さんから海を取ったら、何も残らない。

と語ったあと、

「海に生きると、若き漁師は力込め、顔光

りたり、海に向きつつ」

という、ひいはあちゃんが作ってくれた応援

のうたを見せてくれました。

それから、女川での様子を話し出しました。

女川の海は、サバ、イワシなどが季節関係

なくとれるのだそうです。中でも、一番大き

い大場イワシは、トイレットペーパーのしん

くらしいの大きさだというからびっくりです。

「この大場イワシが大漁だとみんな大喜びす

るんだぞ。」

と、とびつきりの笑顔で教えてくれました。

朝は、四時四十五分に出船なので四時に起き、朝ごはんとお昼は船の上で弁当を食べるといいう話にはびっくりしてしまいました。

一日に三回も水あげをし、夕方四時頃にやっと仕事が終わるといいうから、父の身体がこわれてしまわないのかと心配になつてきました。

でも、漁師一年生の新米の父がベテランの中にまじつて必死で働いているんだなあと思

つたらなんだか誇らしい気持ちになりました。そんな父は、昨年一日も仕事を休まず、会社から「皆勤賞」をもらいました。

だから、この夏、僕は自まんの父と二人で「男旅」に出かけることにしたんです。

本州最北たん、青森県大間町の海と一緒に見るのが一番の目的でした。

っここではな、大きなマグロがとれるんだぞ。と話す父の顔は、なんだか一人前の立派な漁

師に見えかっこよかっただなあ。

父のいない毎日をさびしい、つまらないと
 思っていたけれど、
 このきれいな海と、僕のいる宮古の海、そ
 して、お父さんのいる女川の海、ずうつと
 つながっているんだなあ。
 と思っただけ、なんだか元気が出てくるかんじ
 がしました。

それから、しばらくの間、父と二人でだま
 つて海をながめていました。

「坂幸魚店」の九代目になつてもいいように

付けてくれた僕の名前。それなのに店をつぐ
 ことができなくなつてしまつたことは悔しい。
 でも、こうして海とともに生きている父の
 姿から、僕も必死に頑張れる何かを見つけな
 くてはと思えるようになってきました。

海と共に生きていくと決めた父から、もつ
 ともどいてそのみわを聞こう。自然の恵を与
 えてくれる豊かな海が宮古の海にもまた戻つ
 て来ると信じよう。今日もまた、女川の海が
 う帰つて来る父を長くして待つています。